

第一章 遭遇

二〇〇二（平成十四）年十一月二十九日（金曜日）。

東経新聞経済部記者・広瀬智也は興奮冷めやらぬまま取材先をあとにした。企業倒産が面白い記事の種というわけではないが、今日の夕刊は間違いなく読者の目を引くものになるだろう。原稿が頭の中で無理なく構成されていく。

広い通りに出た途端、思わずジャケットの襟をたてた。もうすぐ師走。高いビルとビルの間から寒気を含んだ風が容赦なく吹きつけてくる。

信号で立ち止まり、今出て来たばかりの七階建てビルを振り返った。新生理想銀行南新宿支店。シンボルカラーの真紅の看板が、弱い冬の日差しにそぐわない毒々しい色彩を放っている。

九時少し前に大手町の本社に出社した広瀬を待ち構えていたのは、夜勤明けのデスクだった。握り飯を頬張りながら、ヤツデの葉のように大きな右手を挙げると広瀬を手招きした。

「おう、広瀬。今日は早いじゃねえかよ。もしかしてあのネタつかんだか」

「何でしょうか」

デスクはお茶をすすると広瀬に顔を近づけた。二センチほど伸びた髭の先から、お茶のしずくが一滴、机の上に落ちた。

「プライム土地開発が今日中に会社更生法を申請するらしい。本社と地裁の方には夜勤明けの奴を送り込んであるから、おっつけ連絡があるだろう」

来るべきものが来た、と広瀬は思う。

プライム土地開発。関東地区を中心に十三の高級ゴルフコースを経営する最大手だ。バブル期に二百億円の年商を上げたが、二〇〇三（平成十五）年に預託金償還のピークを迎える予定のところにもつてきて、不動産投資の失敗で資金繰りがつかなくなった。法的整理決断の日も近い、という噂がささやかれ始めて、そろそろひと月がたとうとしている。

「広瀬。今日は新生理想の取材だったろう。ちょうどよかったじゃないか。あと二時間もしてみる、新生理想じゃ上を下への大騒動だぜ。何しろプライムのメインバンクだからな」

デスクは唇のはしに飯粒をつけながら、薄ら笑いを浮かべる。

「負債額は四千九百八十九億円。シクハツクだよ。笑えねえな」

今年最大の大型倒産になるかもしれない……広瀬はシヨルダーバッグをつかむとタスキ掛けにし、部屋を飛び出した。

『合併 生き残りを賭けて』というタイトルで、広瀬が新生理想銀行支店長の日常を夕刊に連載するようになって半年。ひと月三回のこの特集記事は、概ね好評のうちに読者に迎えられている。

連載にあたってモデルとして選んだのが、先輩記者から紹介された新生理想銀行南新宿支店長・竹村謙作四十三歳だった。【新生理想銀行】は二〇〇二（平成十四）年四月一日、大幸銀行から社名変更し、再編成されたばかりである。支店長の生活を織り込みつつ、この一連の過程を特集するというのが広瀬の狙いだった。そのネタ取りのために十日に一度、竹村を取材している。

それにしても【新生理想銀行】とは恐れ入る。聞く方が気恥ずかしくなるような社名だ。

開店して三十分後の新生理想銀行南新宿支店に足を踏み入れるや、囁れた大声が響いてきた。苦笑いをかみ殺して広瀬はその方向を見た。

大声の主は、山室という八十を過ぎた年金生活者である。通称「B I S 老人」。

グレーの毛糸の帽子をかぶり、毛玉のついたセーターを着ている。椅子の背にかけたジャケットは煮しめたような茶色だが、袖口とポケットは特に汚れて黒っぽく変色していた。

広瀬が初めて取材に訪れた日、定期預金窓口で窓口女子行員を相手に大音声をあげていたのが、この山室老人である。

取材を重ねるうちに懇意になった初老のロビー係の話によると、山室は小口の定期預金口座をいくつか作っては解約し、また作るということを繰り返しているらしい。

行員がアドバイスメいたことでも言おうものなら、すぐさまその言葉尻をとらえて喧嘩腰になる。お得意のせりふは「自己資本比率がB I S 基準に達してないくせに、偉そうなことを言うんじゃない」である。

ふたこと目にはBIS規制を持ち出すので、支店内では『BIS老人』というあだ名をつけられていた。老人のいじめの標的とされている女子行員の中には、『BISじじい』と呼ばれるものもいるということだ。

「病院に行つて時間をつぶす年寄りがいるでしょう。あの人の場合、病院じゃなくて銀行に来るわけですよ」

ロビー係はそう言つて苦笑した。

今日も山室老人は新規窓口前に座り、カウンターに片肘をつくと身を乗り出すようにして、若い女子行員に何やら因縁をつけている様子である。

「公的資金をもらっているんだらう。つまり、あんたたちは公務員つてことじゃないか。それなのにどういふことなんだね、二十分も待たせるとは。公僕のことかい」

若い窓口女子行員は、あいまいな笑いを浮かべて頭を下げている。老人はさらに顔を近づけた。

「BIS基準が厳しいつていうんなら、自分たちでこれというものを作って国際社会に提示しなさいよ。それが国家戦略というもんだらう。え？」

老人は右手でどんとカウンターをたたいた。

「自己努力を怠つておきながら全てをアメリカのせいにする。この国にありがちな自虐的陰謀史観だ。そもそも日本が先の戦争に負けたのだから……」

広瀬は応接室に向かつて歩きながら、老人の言葉を断片的にとらえた。言っていることは必

ずしも間違っていない。老人に少なからず共感を覚えていた。

第二応接室で待つこと数分。携帯電話が鳴りだした。

おお広瀬、俺だ。プライムの件は決まりだ。たつた今、地裁で動きがあったぜ

デスクのどら声を抑えこむようにして携帯電話の蓋を閉めた瞬間、応接室のドアが開いて新生理想銀行南新宿支店長・竹村謙作がそのやせた姿を現した。

「遅くなつてすみません。本部から調査役と公認会計士が来ていました」

こころなしが顔が蒼ざめているようにも見えるが、普段でも精彩を欠いているその表情からは、プライム土地開発倒産の事実を既に知っているかどうかを、推し量ることはできない。しかし、その疑問は竹村のひとつですぐに解けた。

「広瀬さんもさつそくお見えになりましたね。さすがにマスコミは嗅覚鋭敏だ。次号でどう苛められるかが楽しみですよ。メインバンクとしては致命傷ですからね。記事の書き甲斐があるつてもんでしょっつ？」

竹村にしては珍しく皮肉めいた口調である。

「竹村さん、そりやないですよ。本日の面会は先週から決まっていたことですからね。別にプライムに狙いを定めて伺ったわけではありません。そちらの方こそお手柔らかに」

広瀬のやんわりとした抗弁には何も答えずに、竹村はソファに座るなり腕時計に目を落とし、時間はないが一応会ってやる、というジェスチャーだろう。

「会計士からもさんざん言われたところですよ。今日は実にタイミングよく人がそろつています」

「こちらの銀行からの融資額は、どのくらいだったのですか」

「本支店併せて六百二十億ですが、そのうち四百八十億が当支店からです」

竹村は外人のように両手を広げると肩をすくめた。

「まったく参りましたよ」

「支店長は原因をどのようにお考えですか。出資金の償還問題だけではないでしょう」

「プライムは親会社の借入金に対して債務保証をしてたんですよ。うちは親会社の方にも融資してましたからね。早い話がもう」

「踏んだり蹴ったりですね」

竹村支店長は眉をひそめた。

「そうはつきり言わないで下さいよ」

「プライム土地開発の理事や役員には、新生理想銀行出身の方が多いですね。今回の件、事前に情報を流してくれなかったんですか」

竹村が何かを言いかけた時、ドアがノックされて女子行員が顔を出した。

「支店長。お電話です」

「誰から」

しかめ面をしている。

「本店の板垣常務です。大変お急ぎのようです」

竹村は弾かれたようにソファから立ち上がると、「失礼」とも言わずに部屋を出て行った。

さつそく本店の常務からの電話である。 新理想じゃ上を下への大騒動だぜ デスクの

言葉が思い出された。

一分もしないうちに、さきほどの女子行員がドアを開けた。

「申し訳ございません。竹村は急用ができません、本日はお時間が取れなくなりました。のちほどこちらの方からご連絡差し上げると申しております」

様子をうかがうような女子行員の視線に、広瀬は手をふって笑ってみせた。

「支店長さんもいろいろ大変ですね。それでは今日はこれで退散させていただきます」

広瀬は女子行員に促されて部屋を出た。

2

開店後四十分。店舗フロアはいつもと変わらない混雑ぶりを示している。山室老人の姿は既になかった。広瀬はATMで二万円ほど引き出すと店をあとにした。

前方右手に都庁を見ながら、甲州街道を西新宿方向に向かって歩いていく。信号を渡って都営新宿線の地下鉄口に入ろうとした時、広瀬の左肩にぶつかって来た者がいた。

「いや、失敬」

それは山室老人、例の通称BIS老人だった。広瀬は一瞬立ち止まった。山室を取材したら面白いのではないかという考えが頭をよぎったからだ。山室は八十過ぎとは思えない健脚で、広瀬の横をすり抜けて行く。追えないくらいの速さである。

広瀬がその背に声をかけようとした瞬間、突然周囲に大音響がとどろいた。白煙が上がり、頭上からパラパラと小石のようなものが降ってくる。広瀬は頭を抱えたまま、路上にしゃがみこんだ。降り注ぐ白い粉をふり払いながら、同じような格好で座り込んでいる山室老人の姿を目の端でとらえた。

爆弾テロか……。思考のはたらかないぼんやりとした頭の中でそう考える。薄目を開けて歩道を見た。昼間の南新宿なのに人がいないのは不思議だ。周囲はみなやられてしまったのか。いや、向こうからOLらしき二人連れが、笑いながらこちらに向かって歩いてくる。何事もなかったかのように。

山室老人は頭を抱えている。しゃがみこんだままの広瀬は足下に視線を落とした。ハツとした。まるで広瀬のつま先に触れんばかりに、真っ白い手が伸びている。その白い手を目で追った瞬間に、広瀬は自分と山室との間に横たわる物体に気付いた。いや、直前まで人間だった物体、と言った方がいいだろう。

ヘアピースが転がっていた。無意識にさわろうとして、体が固まった。頭皮のついた髪の毛のひとかたまり。

髪の毛のすぐ横に、赤いセーターにベージュのタイトスカートを身に着けた体が、うつぶせ

になって右足をくの字に曲げたまま微動だにしない。

体の左横に奇妙なものが落ちていた。歯科医院に行くと言明の際に用いられる顎の模型である。人の下顎部だ。うつぶせになっている顔の下は一体どうなっているのか。

広瀬は寒気を感じて、思わず立ち上がった。足元がふらつく。

上を見た。地下道入口の屋根に格子状にはめ込まれた一辺一メートルほどのガラス板が、一枚そっくり抜け落ちている。そこから空がのぞいていた。

手のひらに異物感を覚えたので少し動かしてみると、鋭い痛みを感じた。ガラス片が突き刺さって血がにじんでいる。頬をなでると血が広がった。

いつの間にか横に山室が立っていた。上半身に無数のガラス片を浴びたせいか、頬から顎にかけて血が流れている。

「上のガラス板を突き破って落ちて来たんだな。あんた、携帯もっているかい。早く連絡しなきゃ」

しつかりした声だ。ジャケットの胸ポケットから携帯電話を取り出していると、老人が広瀬の肩をたたいた。

「いやなに。空襲に比べれば大したことはない。首がついてるだけいいよ。もっとむごたらしいんだ……」

至近距離まで来たOLが二人、硬直したまま広瀬の周囲を見つめていたが、次の瞬間悲鳴をあげて飛びのいた。二人は抱き合ったまま、顔をそむけた。